

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	シャンソン受容の揺籃期 :白井鐵造とリラとスマレとツクバネソウ <講演要旨>
Author(s)	三木原, 浩史
Citation	フランス文学 , 31 : 55 - 56
Issue Date	2017-06-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00043110
Right	
Relation	



<講演要旨>

シャンソン受容の揺籃期
——白井鐵造とリラとスミレとツクバネソウ——

三木原 浩史

1930年に帰国した白井鐵造が、宝塚少女歌劇団のために、初めて手掛けたレヴュが『パリゼット』。脚本演出とも、白井鐵造。1928-30年の2年間のパリ留学の成果、凱旋公演だ。筋は、パリ渡航から戻った日本人男性二人神原と山中のパリでの色恋を、歌、ダンス、エスプリの効いた、あるいは皮肉な会話で、大真面目に盛り上げた和製「レヴュ」（フランス語の「ルヴュ」）だ。時代背景は、白井自身の留学時のパリ。ただし本場の濃厚なエロティシズムは一切捨象された。演じるのが昭和初期の少女たち、観客も圧倒的に女性、あるいは家族連れゆえだ。こうして、宝塚のモットー「清く、正しく、美しく」は生みだされた。

白井のレヴュ『パリゼット』は、留学当時にパリで流行っていた7つのシャンソンを主題に構成したもので、「白いリラの花咲く頃」の旋律にのせて歌う「すみれの花咲く頃」は有名だが、何故かこのレヴュのタイトルであり、レヴュの冒頭に途中に最後にと、何度も歌われるシャンソン「パリゼット」のフランス語元歌〈*Parissette*〉の歌詞内容については、〈*Parissette*〉というフランス語の意味についてと同様、詳らかにされたことはない。シャンソン〈*Parissette*〉は、レヴュ《*Paris qui tourne*》の中の歌で、ミスタンゲット[Mistinguett, 1873-1956]が、1928年9月2日にキャバレー「ムーラン・ルーージュ」で創唱した。自国が戦場にならなかつたアメリカ合州国は、第1次世界大戦後の1920年代には「ローリング・トゥエンティズ」(Roaring Twenties)と称される繁栄を、1929年のウォール街株価暴落による終焉まで謳歌したが、この狂乱はヨーロッパにも広がり、1920年代半ばまでに、ドイツ(ヴァイマル共和政)、イギリス、フランスで爆発的な好景気が浮上し、1920年代後半には、英語圏では「黄金の20年代」(Golden Twenties)、フランスやカナダのフランス語圏では「狂乱の20年代」(Années folles)と呼ばれる時代が出現した。〈*Parissette*〉(1928年)は、その時期最後の頃のシャンソンで、ヒロインは若く可愛くコケットなパリゼット(パリ娘、パリ小町)。街を闊歩すれば、一斉に声がかかる。贈り物もアーミンのコートに、1920年代最速の自動車「ルノー40馬力」(Renault40CV)。でも堅気でお利口なパリ小町さん、お金に心を売らず、ただただ可愛いお人形さんでいておくれ、といった内容だ。

さて、この〈*Parissette*〉という語は、同じ綴りで、花の名前「ツクバネソウ」(ユリ科多年草)も指す。一説によれば、語源はトロイ戦争で有名なトロイの王子パリス(Paris)に由来するそうだ。生物学上の「二(命)名法」では《*Paris quadrifolia*》(四葉のパリス)、フランス語では《*Parissette à quatre feuilles*》(四葉のパリゼット)と呼ばれ、四葉のクローバーのように十字形に水平に開いた四枚の葉の真中から一本の花茎がすつと伸び、その先に小さな丸い有毒の「青い実」をつけるが、この「四葉」が、それぞれ古代ギリシャ神話で美を競った「アプ

ロディーテー」と「ヘーラー」と「アテーナー」の3女神、及びトロイの王子「パリス」の4人を表象しているという。ゼウスから、ミス女神を決めるようにパリス（その時点では羊飼いの若者）に渡された例の「黄金のリンゴ」（後世のいう不和のリンゴ）の象徴が「青い実」だ。まさに有毒、戦争を引き起こしたのだから。ただ、それとは別に、写真で見る「パリゼット」＝「ツクバネソウ」は、大きく開いた4枚の葉を舞台に見立てれば、ずっと伸びた1本の花茎とその先の実が、華麗な舞台中央にすくと立ち、類稀なる美貌で、見事な脚線美を惜しげもなく披露し、歌い、踊り、演じるレヴュの女王、ミュージック・ホール女王「ミスタンゲット」の姿を連想させる。実は、歌中《...je suis l'article de Paris》という表現がある。単純に直訳すれば、《l'article de Paris》は、「パリ（で作られた）高級小間物」のこと。それ故、先ずは「パリ小町」である自分を「パリ製高級装飾品」に喩える一種の擬人法だ。しかし、《l'article》には植物学で「節・茎節・花茎」の意味があり、《Parisette》は語源こそ違え「ツクバネソウ」という花の名前でもあったので、《l'article de Paris》を「パリという花の茎の一部」とも解せよう。双方のニュアンスを込め、《あたしは生粋のパリ娘》と訳するのが妥当か。白井氏は、「パリゼット」＝「ツクバネソウ」に気づいてはいなかったろうが、少なくとも当時の宝塚の観客にとっては、「パリゼット」＝「パリ娘（パリ小町）」＝「ツクバネソウ」といった表象の二重性より、ハイカラな「パリ娘（パリ小町）」の簡単平明なイメージだけの方が、理解しやすかっただろう。

過去87年を振り返り、白井鐵造のレヴュ『パリゼット』が、宝塚歌劇の未来を約束しただけでなく、日本におけるシャンソンの受容と普及に多大な貢献をしたことは確かだ。たとえ、「シャンソン」は訳詞で歌って当然と言わんばかりの副作用を伴ったとしても、それは決して白井鐵造の責任に帰するものではない。